

## 戴震の水経注剽窃問題における段玉裁の対処のあり方について

若松 信爾

九州女子大学 共通教育機構  
北九州市八幡西区自由ヶ丘二二(千八〇七―八五八六)  
(二〇一四年六月五日受付、二〇一四年七月十日受理)

### はじめに

戴震(一七二三―一七七七)の『水経注』校刊本については、夙に趙一清(一七一―一七六四)の『水経注釈』を剽窃したものであると指摘されて久しい。周知の如くこの事案については戴震没後、戴・趙の間の剽窃の論争のみならず、全祖望(一七〇五―一七五五)の『新校水経注』の出現により複雑化し、多くの学者間で議論が展開されることになった。剽窃を肯定する側の代表には、魏源・張穆・楊守敬・王国維等がおり、戴震を擁護する側つまり擁戴派と呼ばれる代表が段玉裁・胡適・日本の森鹿三等である。この問題については二〇〇八年出版の陳橋驛氏の『水経注論叢』によれば、現在ではほぼ結論が出ているといつてよい。<sup>(1)</sup>清代考拙学の研究方法は梁啓超の『清代學術概論』に、科学的に近いと称されている。戴震はその中心人物であることはいまでもないであろう。梁啓超の言によれば戴震の位置づけは呉派と並び考拙学の正統派である。これら正統派の学風を、梁啓超は十項目にまとめており、その中の六項目には「旧来の学説を用いる

場合は必ず出典を明記し、剽窃することを大いなる不道德とする」と記している。<sup>(2)</sup>

では、なぜ厳密性を尊ばれる考拙学における泰斗、戴震にかかると事態が生じたのであろうか。そこで本稿ではこの事態が生じた発端といえる段玉裁の反応を書簡とその他の文章を中心に考察し、段玉裁のこの問題に対する対処の有りかたを概観していく。

### 一、事案の発端と段玉裁の梁玉繩死書簡

この問題の発端について記録に残る最も早いものとして挙げられるは、胡適の「戴震校水経注最早引的猜疑」という論文に引用されている上海合衆図書館蔵の孫澧鼎校武英殿本『水経注』にある孫澧鼎の跋文である。

吾友朱上舍文藻、四庫總裁王少宰の所より歸り、予の爲に言ふ。「此の書同里の趙□□一清校本を參用す。然れども戴太史一言も之に及ぶ無し」と。<sup>(3)</sup>

この跋文は戴震の死後三年たった、乾隆四五年（一七八〇）に記されたものである。以下胡適前掲論文により、文中の登場人物について述べる。朱上舍文藻とは朱文藻（一七三五〜一八〇六）のことであり、浙江省杭州仁和の人、字は映振、号は朗齋。王少宰とは王杰（一七二五〜一八〇五）陝西韓城の人、字は偉人、号は醒園。「王少宰」と記す所以は当時王杰は四庫副總裁であるが、吏部侍郎でもあったためである。この二人は四庫全書編纂のため、乾隆三七・八年の時点で浙江省での遺書採集において関係があり、朱文藻は趙一清と同郷の仁和の出身であるため趙一清の『水経注積』には特に注目していた。その朱文藻が王杰の所で目撃した、戴震の『水経注』校本は趙一清の説を参考しているが、戴震が書中で一言も趙一清の名に言及していないのに驚き孫禮鼎に報告したわけである。<sup>(4)</sup>これが戴震の剽窃を記録した嚆矢であるが、この時点では『水経注積』が巷間に流布していなかったため騒動にならなかった。

問題が公になったのは、趙一清の『水経注積』を畢阮が出版した所謂開刻本が刊行された乾隆五年以降のことである。因みに『書目答問補正』によると『水経注積』について乾隆十九年趙氏家刻と記されている。<sup>(5)</sup>この家刻本は『書目答問補正』にしか記録がなく、あまり流布しなかったと考えられる。陳橋驛氏はこの家刻本の存在について「もし此の資料が信頼できるとするなら

ば、戴震の（剽窃の容疑は高まり）更に不利な状況になる。」と述べている。<sup>(6)</sup>戴震がこの家刻本を目にしていた可能性については現在のところは不明である。

戴震の剽窃問題が取り沙汰されるようになるのは乾隆五年の畢阮開刻本刊行後であることは前述したが、多くの先学が指摘するように、いち早くこの問題に関して戴震擁護論を展開したのは戴震の弟子である段玉裁である。段玉裁が嘉慶十四年十一月に畢阮開刻本刊行に関係した梁玉繩に与えた「梁北耀に書を与え、戴・趙二家の水経注を論ず」という書簡がある。

水経注の一書は、水道を言ひ、地理を言ふ者の必ず資する所と爲るも、顧みれば宋より以來、踳駁して幾ど讀む可からず。惟東原氏のみ之を治めること最も勤め、其の訛亂を整齐し、鉤棘引歸し、文從字順。上は高宗純皇帝の歎賞を邀へ、詩に心を編纂に悉し、中尉と爲る可し、素臣其の利を食む者と褒らる、沾溉窮り無し。然れども東原氏の功の細大宜しく辨ずべきは、古本に據りて羣籍を搜し、地望を審らかにして、文理を尋ね、一字の奪は必ず之を補ひ、一字の羨は必ず之を刪り、一字の誤りは必ず之を更むは、東原氏の能事なり。然れども其の功の細は、唐・宋の淺學より、書を逸し其の義例を知らず。某を過ぎ某を逕ぐの文を誤認して區別無く、意に任せて互ひに訛り、大氏注經に訛る者十の八、經注に訛

る者十の一・二。東原氏其の例を得るに三有り、一に曰く獨學・複學の同じからず。經文は甚だ簡にして、首に水名を擧げ、下に再び出さず。注文は繁にして、一水の内必ず其の注入の小水を詳らかにし、以て其の間に間廁す。是を以て主水の名屢擧がるも厭はず。注入せる小水の携帯する所の者、相問てること有りと雖も亦屢小水の名を擧ぐ。經文は斷じて是無し。一に曰く過・逕の同じからざるなり。經は必ず某を過ぐと曰ひ、注なれば則ち必ず逕ぐと曰ふは、經を別つ所以なり。一に曰く某縣及び某縣の故城の同じからざるなり。注の所謂某縣の故城とは即ち經の某縣なり。經の時の縣は、注の時多く故城と爲る。經は故城と言ふ者無きなり。此の三例を執れば、沛乎として禦ぐ莫し。之を釐め振稿して、承學し讀みて白首に至るまで解せざるが如き者有るも、豁然として開朗せん。王伯厚・顧景范・胡拙明・閻伯詩の稱引の誤、今皆正し可し。此れ則ち東原氏の功の大なる者なり。(7)

冒頭から段玉裁は師である戴震の『水經注』における功績を述べ、戴震校勘の殿本の三つの優れた点をあげる。第一に經文と注文では河川の名称の挙げかたに違いがあること、一文中經文は始めに名称を挙げるのみで再び挙げないが、注文では一文内と同じ河川の名称が頻出する。第二は過・逕の用字の相違である。經では某を過ぎといひ、注では某を逕ぐという表記になる。第三に經は某

県と表記するが、注では某県の故城という表記である。段玉裁は以上の三点を戴震の創見であると高く評価する。この三点が戴震の創見であるかともかくとして、書簡の続きを見ていくことにする。先ず殿本と『水經注釈』について以下の如く述べる。

戴震甲午に上り、命を奉じて刊版す。十有三年を超えて丙午、杭郡の趙誠夫先生の水經注釈の一書始めて出づるも、東原は丁酉の夏に没せり。僕今年に至りて始めて友人より借りて趙の書を読む。其の據る所の古本の校本の多き、考へる所諸史百家の富、采る所の諸老宿の顧亭林・顧景范・閻百詩・胡拙明・何紀瞻・全謝山の諸論、羣言を折衷し、自ら得る所を據べ、其の字句に於いて各本の異同、黒白を別ち、一是を定め、戴書と詳略互ひに證す可く、精詣互ひに求む可し、而して最も異なる者は、經・注を更正するも、亦大略は戴と異なる無し。夫れ字句の一・二を竄むるに偶ふは、校古の常なり。經・注を取りて互ひに之を易ふは、校古の創にして、人の爲す能はざる所の者なり。東原氏灼知して創めて之を爲す。故に經・注の義例を條擧して、全書の首に冠し、大いに天下に白す。(8)

これを見ると、段玉裁も「大略は戴と異なる無し」とあるように、両書の内容は互いに近似するものとしてとらえている。また、先の三条例を戴震の創見と稱賛することは前の如くである。

趙の書は乾隆甲戌に成り、戴の書は乙酉に成る。相距ること十二年、趙は戴より先んず。戴の書は甲午に出で、趙の書は丙午に出づ、相距ること十三年、戴は趙より先んず。其の果して戸を閉じて車を造り、門を出て轍を合するか。何を以て東原氏の條學義例、誠夫は一字を著はさざるや。兩先生の齒、趙は戴より長ず、其の將に戴諸を趙より取ると謂はんとするか。則ち東原氏の德行盜竊の人物にして、以て主上及び天下を欺くに者に非るなり。僕從游の日久きも、未だ嘗て言之を聞く所有らざるなり。且つ兩先生は、面未だ嘗て相識らざるなり。足未だ嘗て相過らざるなり。誠夫の書は高度に秘藏し、其の孫に至りて刊行せられ、未だ嘗て稍も外に傳らざるなり。此れ兩家の子弟の知る所にして、誣ふ可からざる者なり。將に趙諸を戴より取るといはんとするか。則ち誠夫の學も亦盜竊の人物にして、以て天下を欺く者に非るなり。未だ其の何年に卒するかを詳らかにせざるも、即ち乙酉以後東原氏の説を聞くを獲て、己の書に補綴すれば、亦必ず出す所を明言し、斷じて深く其の文を没し黙黙とせざるのみならん。此れ僕の疑ひ無き能はざる所の者なり。<sup>(9)</sup>

以上段玉裁は両書を比較しその成立に関して述べる。『水経注』の成立は乾隆十九年、殿本『水経注』は乾隆三十年と、稿本

の成立は趙一清のほうが早く、その出版は殿本が乾隆三十九年、『水経注』は五一年であり出版は殿本のほうが早い。にもかかわらず、両書の内容が相似するというのは如何なることであろうか。お互い剽窃してないとすれば解釈に苦しむことになる。段玉裁はこの点について、戴震については久しく從学していたが、『水経注』についての言及はなかつたと述べる。また戴震・趙一清の両者は生前互いに交際したこともない。しかし趙一清の『水経注』の稿本は秘藏され、その出版は孫の代である。趙一清は乾隆二九年に他界しているが、段玉裁は趙一清の没年を知らず「乙酉以後東原氏の説を聞くを獲て、己の書に補綴すれば」と記しているように、一応乾隆三九年以後も趙一清が生存し殿本を見ている可能性も考えている。しかし、そうだとすると趙一清が戴震の説を引用したならば、必ず出典を明記するはずだが、趙一清は戴震の名を挙げてはいないのである。そこで段玉裁は「此れ僕の疑い無き能はざる所の者なり」と記している。結果としてこの時点で段玉裁が下した判断は以下の如くである。

丙午丁未の間、盧召弓先生予爲に言ふ、「梁氏耀北・處素の昆仲趙氏の水経注を校刊し、東原氏の書を參取して之を爲す」と。今僕此の言を追憶し、意へらく足下昆仲校刊の時一切舊に仍るも、獨り經注互ひに訛るの處は、戴に從はざれば則ち多く通ず可からず。故に戴に從ひて以て趙の書を補正し、以

て鄙書の善本を成し、戴と並び行はんと勇む。鄙を護る所以なるも趙に阿る所以に非ず。召弓の云ふ所の東原氏を参取し之を爲す者なり。足下昆仲の意は則ち善し。但だ足下亦宜しく深く其の文を没し、黙黙とするべからざるのみなり。果たして戸を閉じ車を造り、門を出て轍を合するに出れば、當に其の奇を著して、以て東聖・西聖の心理の必ず同じなるを見るべし。果たして相取るより出づれば、當に其の實を著して、以て多聞従善の有益を見はずべし。果たして二公未だ嘗て相取らざれば、校刊を出す者集腋裘成して、亦當に後序を爲りて以て之を發明し、以て鄙書の完善を期して光を鄰壁に借りるに非ざるを見すべし。不らざれば則ち僕の疑ひを解く無く、亦天下後世を解く無からん。或いは戴趙を取ると謂ひ、或いは趙戴を取ると謂ふの疑ひは、是れ則ち足下昆仲將に戴を尊ばんとするも戴を侵すに適り、將に趙を助けんとして趙を誣うるに適るなり。此れ僕の敢へて言はずんばあらざる所以なり。(中略) 足下今に及びて後序を爲り、趙の書の末に刊し、洞じて原委を陳べ、天下後世の疑ひを破り、兩先生をして皆美を竊むの誇りを地下に被らざらしめよ。僕實に企望す。願はくは明らかにして我に教へよ。<sup>⑩</sup>

この文によると、段玉裁は乾隆五十一年から五十二年の間に校勘学の大家盧文弨(一七一七〜一七九五)より「梁玉繩・履繩の兄弟

が趙一清の『水経注釈』を校刊した時、戴震の校本を参考にして「いる」という話を聞いたという。段玉裁は梁玉繩に対して戴震・趙一清の著作の相似は偶然の暗合によるのか、剽窃によるのか、もし盧文弨の言の如くであれば、何故その旨を後序等で仔細に述べないのか、との疑問を呈し、書簡の最後において、このような事案が起きた原因を梁玉繩に対して厳しく詰問している。これに対する梁玉繩の書簡があつたのかは後述する。梁玉繩の文集『清白士集』を見てもこのことに関する文はないため、なにも返答していないのは梁玉繩が黙認したという見方もある。<sup>⑪</sup> また段玉裁書簡において全祖望について言及されていないのは、この時点では全祖望の『新校水経注』の存在は知っていたが、その内容に關しては知らなかつたのであろう。鄭坤徳はこれが戴・趙疑案の発端であるとしている。<sup>⑫</sup>

## 二、『直隸河渠書』と方葆巖死書簡について

「段玉裁年譜」によると前章の書簡の翌年の嘉慶十五年二月に、戴震の息子である戴中孚が段玉裁のもとを訪れている。

二月、戴東原の嗣子中孚、直隸河渠書の稿一百單二卷、合せて二十四冊を携へて蘇州に至り、先生に校刊を屬す。先生曰く我力能く校するも、刊する能はざるなり。被讀往復して、其の書の繁重を見れば、織悉畢く備はる。毎に李松雲とともに

にこれ必ず底稿有り、斷じて戴氏一年の内、一手の能く成す所に非ざるなり。<sup>(13)</sup>

これは戴中浮の持参してきた、戴震の著作『直隸河渠書』出版に関する記事である。段玉裁自身は校正は可能であるが、出版については無理としながら、李松雲とこの膨大な著書を戴震が一年ほどで完成させたことについて疑問を感じている。

さて、『直隸河渠書』の出版についてであるが、段玉裁は王念孫にも相談しているが、<sup>(14)</sup>資金力の面からでもあろう、閩浙總督である方維甸(号、葆巖)に依頼している。その理由は方維甸の父親である方觀承(諡、恪敏)が、直隸總督の時に当時幕客であった戴震に命じて作らせたためである。<sup>(15)</sup>嘉慶十五年、段玉裁は方維甸宛に「方葆巖制府に与えるの書」を記している。

葆巖制府閣下、大門中恪敏稿直隸に總督たりしとき、乾隆戊子戴東原師を蓮花書院に延請し、直隸河渠書一部、凡そ百有二卷を撰次す。(中略)恪敏の經畫に非れば此の書の規撫を創むる能はず。東原師の地理に熟し、博洽精敏に非らざれば、年餘にして遂に此の書を成し、國家の鉅製を爲す能はず。顧みれば恪敏未だ進呈するに及ばず、閣下冲年に方り、書遂に流轉して呉江に落ち、惟東原師のみ其の副を藏し真本と爲す。乾隆癸巳、東原師特に召しを奉じて、四庫館纂修に充れ

られ、高宗純皇帝深く戴震の天文地理の學、精義入神にして、其の水経注及び九章・周髀算經等の書考正するを知り、御製の詩編嘉美し頒行す。丁酉に泊び都門に卒し、其の著述は曲阜の孔戸部誦伯繼涵の家に藏し、此の書焉に在り。洪舎人蕊登榜は戴の行状を作り、孔檢討摺約廣森は戴氏遺書總序を作る。皆直隸河渠書六十四冊と記す。嘉慶十四年、呉江の捐職通判王履泰なる者有り、此の書攘竊し、名を畿輔安瀾と易へ進呈す。上嘉して有用の書と爲し、賞するに同知を以てし、北河の効用に發し、仍りて武英殿に命じて刊行す。聖明は天縱にして、此の書を一見し、即ち通儒に非れば爲す能はざるを知り、故に其の書を天下に布く。高宗皇帝の賞識と戴震の先後揆を一にすは、豈千載の盛時に非ずや。且つ上の所謂有用の書とは、獨り其の考古の精覈に非ざるなり。亦今の用に切なるを謂ひ、三輔の興利除害の必需する所と爲る。(中略)東原師の子中浮、曲阜の孔氏の藏する所の真本を抱き都に入り、軍機章京龔麗正とともに往きて(畿輔安瀾の)刻板せる處略觀るも、其の悉く原書を用ひて妄りに刪併を爲し、略乾隆戊子以後事実を増し、百二卷を改めて五十六卷と爲すを知る。且つ移して其の目次の先後を易ふ。原本は衛河を首とし、地勢を以て南より北して次と爲すなり。今乃ち永定河を首とすれば、則ち全く其の義例を失す。竊に謂へらく履泰何物ぞ、乃ち敢へて通儒の書を刪定すれば、恐らく著書の用を失せん。

閣下は文章政事、淵源世美、宜しく奏して是の書の原委を明らかにし、真本を取りて進呈重刻して、以て聖鑒の明を章らかにし、以て先志の美を成し、以て東原の著作の光を發し、以て履泰の盜名の罪を懲らしむべければ、紹聞の實用を究め、聖代の經綸を助けて、幸甚。幸甚。<sup>(15)</sup>

これを見ると、戴震が方承觀の指示により『直隸河渠書』を編纂した経緯が分かる。しかし、この書は奇剛に付されることなく稿本のままであった。方承觀の没後その稿本は呉江の王履泰なる人物が入手し、自著として書名を『畿輔安瀾志』とし、内容も改編して出版している。後に戴・趙の剽窃の件も問題になつていくが、当時はこのような著作の盗用が多かつたのであろうか、この時代を知る上で興味深い話である。しかも、『畿輔安瀾志』は乾隆帝の嘉賞する所となり、武英殿から刊行されている。段玉裁はこれを師を冒瀆するものとして戴中孚とともに『直隸河渠書』を出版し、真の作者は王履泰ではなく、戴震であることを知らしめるべく方維甸に訴えている。

そして翌嘉慶十六年、段玉裁は嘉慶十五年の「段玉裁年譜」における記述にある李松雲と討議した疑問、つまり果たして戴震が一年でこの大著を成し得たのか、ということについて解答を得た。それは「趙戴河渠書弁」という文に以下の如く記されている。

是の年冬、松雲都に入る。杭州の何夢華元錫來りて言ふ、「直隸河渠書は乃ち趙東潛の作なり。戴先生に於いては渉る無し。往に孔漢谷丈戴氏遺書中に收入するは誤りなり」と。余二十四冊なる者を以て之に示す。彼云ふ「趙氏の書は尚多きこと一倍、此れに止まらざるなり」と。余曰く「吾故に吾師の一年内に書を成して百二卷の多きに至ることを疑ふ。今足下趙書乃ち更に此れに倍すと云ふ、然らば則ち趙は草創を爲して戴は刪定を爲すや」と。屬して其の將に趙の書の寄來して一觀せんとするも、未だ至らざるなり。十六年春正月、松雲都より還り、武英殿聚珍板畿輔安瀾志を以て相示す。其の確かに戴の書を竊取して、繁を刪り簡に就くを爲すも、不學無術にして、爲す所頓に盧山の真面を失するを知る。蓋し此の書の美は繁に在るも、彼は盡く夾行細注を將て刪去し、古今を考訂する者をして、俱に假偃として幽室に在らしむ、是れ惜しむ可きなり。二月、松雲復た葆巖制府の札を以て相示し、夢華已に趙の本を將て葆巖に抄送して、葆巖趙氏此の書を作るは證據有る可きを問ふを知る。松雲余に屬して之を考えしむ。余謂へらく趙氏此の書を爲るも、惟汪韓門集の保定旅懷詩のみ道ひて之に及ぶ、董浦・謝山は皆老友なるも、集内に皆未だ道ひて之に及ばず。即ち東潛文稿も亦道ひて之に及ぶの語無し。然れども其の書稿は家に藏され、固より確然として東潛の作爲るを信ず可きなり。吾師の書に至りては、則ち

孔洪谷の収蔵有り、洪舎人榜の戴氏の行状有り、孔檢討搨約の戴氏遺書總序有り、程方正易田の余に答へるの書有り、余親しく吾師此の書を撰するの語を説くを聞き、師の親筆に「戊子、余方制府の請ひに應じて、保定の蓮花池の園内に寓し、河間の同知黄君の灤河の源を尋ねて至るに適ふ」の語有り、皆據證とす可し。夢華乃ち「此の書は戴氏に預かること無し」と云ふは、乃ち確語に非ざるなり。松雲云ふ「東原先生は人の書を攘竊する者に非ず、若し東原大いに刪潤を爲すに非ずんば、斷じて其の副本を抄して己の書と自稱せざるなり。蓋し趙は草創にして戴の刪改は必せり」と。松雲の見る所に余と合す。<sup>(16)</sup>

段玉裁が『直隸河渠書』の編纂について得た情報は、先ず杭州より来訪した何夢華がもたらしたもので、作者は戴震ではなく趙一清であるとするものである。先に段玉裁は李松雲と討議し、戴震が一年間を以てこの書を完成させたとは到底考えられないとした、そこでこの情報から趙一清の草稿を戴震が改定したのではないかと推測している。嘉慶十六年二月、李松雲が方維甸の書簡をもつてきた。内容は何夢華が方維甸の許へ趙一清の草稿の写しを送り、方維甸の方からその事実の証拠を求めてきたものであった。段玉裁と李松雲の見解は一致しており、最初に段玉裁が推測した如く、趙一清の草稿に戴震が改定したものが『直隸河渠書』の編

纂過程である。と結論づけている。段玉裁は続いて趙一清と戴震を比較して述べる。

今二公の書、固より當に並び存すべし。趙は地理に精なりと雖も、地理の學は尚ほ戴に及ばず。文章の學も亦戴に及ばず。今日に在りて論ずれば、自ら戴を以て主と爲し、趙の書を以て其の訛字を校勘すべし。戴の書の唐河卷一の中に「杭人趙一清水經に補注し、地理の學に於いて甚だ核む。嘗て定州に遊び、定州の牧姚立德の爲に、盧奴水考を作り、並びに右下に附す」と云へる有り。盧奴水考を附し云々は、今此の編は東潛文稿に見ゆ、吾師方に趙の文を採擷するも、此れ豈に戴の書は即ち趙の書と謂ふを得んや。趙は直隸河渠水利書と名づけ、吾師は直隸河渠書と曰へば、水利の二字は吾師の刪所、河渠を以て之を包ぬるに足るなり。<sup>(17)</sup>

これを見ると、段玉裁は師である戴震の著作を趙一清より高く評価しているのは当然ともいえる。しかし、次に戴震の『直隸河渠書』の中から戴・趙水経注剽窃に関わる極めて重要な文言を抄出している。この「杭人趙一清水經に補注し、地理の學において甚だ核む」というこの戴震自身の発言は戴震が趙一清の『水経注釈』の存在を知り、且つ読んでいた可能性を裏付ける証左である。段玉裁は皮肉にも戴震の剽窃疑惑を高める有力な証拠を提出した



といえる。この一文はその後の戴・趙剽窃論争大きな影響を与えた。このことについては後述する。

嘉慶十六年に段玉裁は再び方維甸に書簡を送っている。「方葆巖に与う」がそれに当たるとする。

乾隆甲申以前は趙東潛を延きて之を草創し、戊子は東原師を延きて之を刪定す。支幹の経緯、古今の變遷、事実の清析、諸を掌に指すが如し。今水患を治め水利を興す者をして、百世持循する所有りと雖も、此れ其の功小ならざらしめん。趙の書名は直隸河渠水利書、百三十卷。戴は改めて直隸河渠書と稱し、水利の二字を去る。百二卷。原書を減ずること三十卷にして、灤河・熱河は僅かに涯略を存するのみ、恪敏是の年秋後位に薨じて、書遂に未だ竟げざるなり。趙の書の灤河六卷は、若し戴本の刊版するに依らば、則ち灤河は趙の書を取り補綴す可し。戴の本の影抄に係わるは曲阜の孔府原本、原本は舛訛特に甚だし、今趙本有り互いに校し、訛脱尚ほ推求可きを想ふ。(18)

これによると段玉裁は『直隸河渠書』の出版は趙一清の『直隸河渠水利書』と互いに校正すべきことを説いている。つまり趙一清の『直隸河渠水利書』が『直隸河渠書』を補完すべき重要な文献であると認識しているのである。

以上段玉裁の方維甸宛書簡と「趙戴河渠書弁」を見てきたが、段玉裁は嘉慶十五年の時点では、趙一清の『直隸河渠水利書』の存在に気づいていない。しかし、嘉慶十六年になると趙一清の著作が戴震に多大な影響を与えていることを発見する。しかも『直隸河渠書』のみならず『水経注』においてもその証を得ているのである。この問題に対して段玉裁は如何なる判断を下したのであるか。

### 三、段玉裁の戴・趙問題に対する解釈

前述した戴震の『直隸河渠書』中における「杭人趙一清水経に補注し、地理の学に於いて甚だ核む」という一文は戴・趙剽窃問題に大きな波紋をあたえた。後世この文言を以て戴震の剽窃の明証とする説もある。確かにこれは戴震自身の発言であるため重要であることは間違いないであろう。以下、この文言に関する主要な人物の反応を列挙してみる。

・張穆（一八〇五～一八四九）、「關於戴校本水経注」

夫れ著書を經始するは甚だ難きも、踵事の修書は稍く易きことは古今の通義なり。戴氏は乃ち自ら易きに居るを欲せず、遂に深く一清の草創の勞を没す。茂堂從學の久しき以てすると雖も、與に此の書を論ずる者は一端に非ず、亦戴氏は更に藍本有るを聞かず。直に何元錫の小山堂に従り其の副

本を寫し、然る後戴の書は即ち趙の書なるを知るに至るなり。戴の書中に趙氏の盧奴水考を載せ、杭人趙一清嘗て定州に遊び、州牧姚立德の爲に此の考を作り、竝に右に附す云々と云ふ。一ら趙氏は絶えて河渠書に與る無き者に似たり。茂堂乃ち趙は地理に精なりと雖も、尚ほ戴に及ばず、文章も亦戴に及ばずと曰ふ。此の語良に然り、然れども其の及ばざる因りて、遂に盜據の傷無きと謂ふを得ざるなり。戴氏をして原本を標明して之を刪補せしむれば、豈に甚だしくは美ならずや。何ぞ乃ち此の穿窬の行を爲さんや。(19)

・王国維 「聚珍本戴校水経注跋」

直隸河渠書を修むる時、東原此の書を修むるに實に東潜の後を承る。當時は物力豊盛、趙氏の河渠書稿百三十卷、戴氏の河渠書稿百十卷、并せて數寫本有り。又趙校水経注、全氏雙韭山房録二部有れば、則ち全氏の校本、趙氏も亦必ず之有り。水経注は河渠書を纂する時の爲に第一の要書なり。故に全・趙二校本、局中に必ず寫本有るは疑ひ無し、東原之を見るは、自ら必ず此の時に在り。(20)

・丁山 「酈学考書目」

段玉裁の直隸河渠書辨に、戴書の卷一唐河中に「杭人趙一清水経に補注し、地理の學に於いて甚だ核む、嘗て定州に遊び、州牧の爲に盧奴水考を作る」と云える有るを引く。是れ乾隆卅三年(一七八六)、戴河渠書を修める時、確かに趙釋を見る。(21)

・余嘉錫 「四庫提要弁證水経注按語」

戴震の経字は精緻を極めて、その性格は自信満々であり、其の著作である『孟子字義疏證』を見れば朱子を誇り、また『屈原賦注』にいたっては、ただ朱子の『楚辭集注』のうわべだけ変えて、ほぼ潤飾して自分の著作としている。(中略)況してや同時代で名声が自分より下で、有名ではない趙一清の著作ともなればなおさら(盜作する)であろう。段懋堂は戴震は趙一清の説を剽窃していない、戴震にはその必要がないからだ。といっているが、これは王子雍が鄭康成を批判したようなもので、(戴震)は直ちに剽窃して自分に説にしただけである。そうでなければ、どうして直隸河渠書を趙一清の著作のあとに再び編纂したのであろうか。(22)

多くの人士がこの一文を以て、戴震の剽窃の明証としている。しかも、鄭德坤は「水経注趙戴公案判決」において先の一文を戴

震の自供の辞とし、戴震が趙一清・全祖望の著作を剽窃したことは間違いないとしている。<sup>(23)</sup>しかし、森鹿三はこれに対しこの文をもつて證據とするのは腑に落ちかねるという。<sup>(24)</sup>

いづれにしても段玉裁の発表したこの文が戴震の剽窃問題に対し、大きな反響をもたらしたことは間違いないであろう。段玉裁はこの問題について嘉慶十六年以降、如何に取り組んでいたのであろうか。残念ながらこの間の文献の徴するべきがないため推測の域を出ない。梁玉繩からの段玉裁宛の書簡は残存していないことは前述した。この点について胡適（一八九一～一九六二）は梁玉繩からの返書はあつたのではないかとして、その内容を以下のように推測する。

段玉裁が（書簡で）梁玉繩に質問した時に、彼は完全に誰にも会わず学説が暗合するという可能性を否定することはなかつた。梁氏からの返書はすでに存在していないが、梁氏から返書があつたことは疑いない。梁氏はその返書の中で、全祖望と趙一清の交友と両者の水経注研究の経過を詳述し、その上趙の書の巻首に全氏が河・濟・渭・洛・淮・江・沔の七水は経・注が互いに混淆した状態であることを発見し、「書を馳せること三千里にして京師に至る」というかたちで（趙一清）に告げた。趙氏は初めてこれを聞き夜寝られなかつたが、遂には其の説を受け入れて修正した。という美談があるとい

い、この話について段玉裁は大いに理解を示し、また信用した。彼自身古音学を治めたので、自身が江有誥が戴震・孔広森らが互いに面会してないだけではなく、その上、彼らの古韻を論ずる書も読まなかつたが、思いもよらず古韻の分別を調べて、結論は彼らも往往にして暗合するのを見ている。段玉裁が晩年戴東原先生年譜を編纂した所以は、趙・戴水経注の疑案に対して、完全にこのような暗合現象を主張したものであつた。<sup>(25)</sup>

胡適のこの推測は傾聴するにあたいする。つまり梁玉繩の返書内容を読んだため、段玉裁の「戴震年譜」では戴震と趙一清の説は暗合であるという結論になつたとするものである。周知の如く胡適の一連の『水経注』研究は戴震の剽窃を否定することを主眼としていることはいうまでもない。しかし、逆に梁玉繩の返書あつたとして、それが戴震について非常に不利なことが書かれていたとするならば如何であろうか。つまり、返書の内容に戴震が趙一清の著書を剽窃したという有力な情報が記されていたという可能性である。胡適は段玉裁の死後その弟子達が段玉裁の文集『経韻楼集』に梁玉繩書簡を收入しなかつたといっているが、<sup>(26)</sup>これは意図的に收入しなかつたと考えられる。なぜならば段玉裁と顧千里が論争した時、『経韻楼集』には段玉裁に不利になる書簡は敢えて收入しなかつたためである。<sup>(27)</sup>この事例から考える

と、この場合も同様であったとしたほうが納得できる。もし梁玉繩の返書が単に両者の「暗合」を裏付けるものであれば、文集に収入して然るべきであろう。

そこで考えられるのは戴震剽窃説を回避し、この問題を解決するため段玉裁は暗合説に帰着せざるを得なくなったのではないか。そこで嘉慶十九年に完成した「戴震年譜」の乾隆三十九年、五十二歳の個所の記述をみてみる。

杭州の趙東潜一清地理の學に精し、水経注を研摩すること數十年、但其の校本は未だ京師に至らざるに従るのみ。先生と趙とは或いは相聞ゆと雖も、未だ嘗て相識らず、其の業とする所は未だ嘗て相觀ざるなり。四庫館遺書を搜討し、趙の書も亦著録ざるを得、其の書字句を校正し、地理を剖析するに及ぶこと最も詳らかなり。而して更に經・注を正すこと、一に戴本の如きは、蓋し趙は精詣羣を絶すればなり。鄧の全謝山太史是の書を七校し、深く秘奥を窺ふ。兩公交り最も深し、或いは戸を閉じて暗合し、或いは麗澤相取りて、其の説往往にして先生と同じ、是れ以て著書の精美にして、千年の後校讎誤正の人無きを患へずして、学問の深醇は、即ち未だ相謀らざるも言ふ所一の如きを知る可し。且つ趙の書は錢塘の梁處素履繩を経て校刊す。合はざる者有れば、戴本を據りて以て之を正す。故に今二本大段同じからざる者少きなり。(28)

この文面から窺えるのは、嘉慶十四年の「与梁耀北書論戴趙二家水経注」におけるすべての疑問が氷解した如き感が認められる。つまりこれにより、戴・趙の間に剽窃は存在せざる事を明瞭にしたのである。これが段玉裁の出した結論である。

これが真実であるかどうかは別問題である。恐らく段玉裁は師である戴震の名誉を守るために、かくの如き結論に至ったのではなからうか。ここで戴震の性格を考えてみる必要がある。戴震の性格については河田悌一氏の「同時代人の眼―章学誠の戴震観」という論考に、章学誠の眼に映った戴震の姿が述べられている。そこには戴震には批判されるべき「口談の繆」三点が挙げられる。その一つに「司馬遷と班固二史の優劣を問うものがいたが、戴震は鄭樵が班固をそしつた言を盜襲しておきながら、あつかましくもそれをあたかも自分の創見のごとく述べていた。」(29)とある。このような性格からも戴震の剽窃疑惑は避けられないのではなからうか。

## おわりに

以上、段玉裁の書簡を中心に戴・趙剽窃問題を概観してきた。これにより窺えるのは、段玉裁は嘉慶十四年の「与梁耀北書論戴趙二家水経注」執筆時においては趙一清の剽窃を疑っており、また盧文弨の「梁氏耀北處素の昆仲趙氏の水経注を校刊し、東原氏

の書を参取して之を爲す」という言を信じ、梁玉繩達が戴震の説を剽窃して『水経注釈』を校刊したのではないかと厳しく詰問している。翌嘉慶十五年では戴中孚の持ち込んできた『直隸河渠書』出版について方維甸に助力を乞うている。そして嘉慶十六年、段玉裁は方承観のもとで戴震は先行する趙一清の『直隸河渠水利書』を参考に『直隸河渠書』を編纂している事実と逢着する。しかも戴震自身の「杭人趙東潛水経注に補注し、地理の学において甚だ核む」という一文を見るに及び、戴震は生前趙一清と直接面晤していないが、その著作を読んでいた事実を把握したはずである。その後嘉慶十九年までの「戴震年譜」の完成の間に、推測ではあるが段玉裁は梁玉繩よりの返書を受け取ったと考えられる。そこで趙一清と全祖望の関係等の事実、または戴震側に不利になる情報を得たのではないだろうか。また梁玉繩の返書がなかつたにしても、何処からか全祖望の著作や戴震剽窃の証を得ていたのかもしれない。そこで「戴震年譜」において三者暗合説を唱えこの問題を糊塗しようとした可能性がある。しかしこの「年譜」において段玉裁はミスを犯したのではないだろうか。「年譜」には「先生と趙とは或いは相聞ゆと雖も、未だ嘗て相識らず、其の業とする所は未だ嘗て相観ざるなり」記すが、これは「杭人趙東潛水経注に補注し、地理の学において甚だ核む」という記述と矛盾している。「地理の学において甚だ核む」という語は、明らかに趙一清の『水経注釈』の内容を指しているのは間違いない。段玉裁は師

である戴震を擁護するため、敢えて三者暗合説を強調し、このよ  
うな齟齬を来たさざるを得なくなつたと考えられる。

## 注

- (1) 陳橋驛「趙一清与水経注」『水経注論叢』所収 浙江大学出版社 二〇〇八年 一八二頁 陳橋驛は「戴震は当然趙の書を見たことは疑いの余地はない」とのべている。大勢は戴震の剽窃を肯定している。
- (2) 梁啓超『清代學術概論』『飲冰室合集』八卷所収 中華書局 一九八六年 三五頁
- (3) 胡適「戴震校水経注最早引起的猜疑」『胡適全集』十六卷所収 安徽教育出版社 二〇〇三年 一二五頁 「吾友朱上舍文藻自四庫總裁王少宰所歸、爲予言此書參用同里趙□□一清校本。然戴太史無一言及之」
- (4) 前掲書 一二五頁
- (5) 張之洞・范希曾『書目答問補正』新興書局 中華民國六十八年 九六頁
- (6) 陳橋驛「水経注戴・趙相襲案概述」前掲書所収 三〇一頁
- (7) 段玉裁『経韻樓集』上海古籍出版 二〇〇八年 一七二頁「水経注一書、爲言水道言地理者所必資、顧自宋以來、

踳駁幾不可讀、惟吾師東原氏治之最勤、整齊其訛亂、鉤棘引歸、文從字順、上邀高宗純皇帝歎賞、詩褒悉心編纂、可爲中尉。素臣食其利者、沾溉無窮矣。然東原氏之功細大宜辨、據古本搜羣籍、審地理、尋文理、一字之奪必補之。一字之羨必刪之、一字之誤必更之、東原氏之能事也。然而其功細、自唐・宋淺學、逸書不知其義例、誤認過某逕某之文無區別、任意互訛、大氏注訛經者十八、經訛注者十之一二。東原氏得其例有三、一曰獨舉・複舉之不同、經文甚簡、首舉水名、下水再出、注文繁、一水內必詳其注入之小水、以間廁其間、是以主水之名屢舉不厭、雖注入小水有所携帶者、相間亦屢舉小水之名、經文斷無是也。一曰過・逕之不同也、經必曰過某、注則必曰逕某、所以別於經。一曰某縣及某縣故城之不同也、注所謂某縣故城者即經之某縣也、經時之縣注時多爲故城、經無言故城者也。執此三例、沛乎莫禦、釐之有如振槁、承學讀至白首不解者、豁然開朗。王伯厚・顧景范・胡朏明・閻伯詩稱引之誤、今皆可正、此則東原氏功之大者也。

(8) 前掲書 一七二頁、一七三頁 「戴書上於甲午、奉命刊版、越十有三年丙午、杭郡趙誠夫先生水經注釋一書始出、而東原沒於丁酉之夏矣。僕至今始從友人借讀趙書、其所據古本校本之多、所考諸史百家之富、所采諸老宿顧亭林・顧景范・閻百詩・胡朏明・何杞瞻・全謝山諸論、折衷羣言、自

據所得、其於字句各本異同、別黑白、定一是、與戴書詳略可互證、精詣可互求、而最異者、更正經注、亦大略與戴無異。夫字句偶竄一二、校古之常也、取經注互易之、校古之創、人所不能爲者也。東原氏灼知而創爲之、故條舉經注之義例、冠於全書之首、大白於天下」

(9) 前掲書 一七三頁 「趙書成於乾隆甲戌、戴書成於乙酉、相距十二年、趙先於戴。戴書出於甲午、趙書出於丙午、相距十三年、戴先於趙。其果閉戶造車、出門合轍與。何以東原氏條舉義例、誠夫不著一字也。兩先生之齒、趙長於戴、其將謂戴取諸趙與。則東原氏之德行非盜竊人物、以欺主上及天下者也、僕從游日久、未嘗言有所聞之也。且兩先生者、面未嘗相識也、足未嘗相過也、音問未嘗相通也。誠夫之書秘藏高度、至其孫刊行、未嘗稍傳於外也。此兩家子弟所知、不可誣者也。將謂趙取諸戴與。則誠夫之學亦必非盜竊人物、以欺天下者也。未詳其卒於何年、即乙酉以後獲聞東原氏之說、補綴已書、亦明言所出、斷不深沒其文默然而已也。此僕所不能無疑者也」

(10) 前掲書 一七三頁、一七四頁 「丙午丁未間、盧召弓先生爲予言、梁氏耀北・處素昆仲校刊趙注水經注、參取東原氏書爲之、僕今追憶此言、意足下昆仲校刊時一切仍舊、獨經注互訛之處、不從戴則多不可通、故勇於從戴以補正趙書、以成鄙書善本、與戴並行。所以護鄙而非所以阿趙、召弓所云

參取東原氏爲之者此也。足下昆仲之意則善矣、但足下亦不

宜深沒其文、默默而已也。果出於閉戸造車、出門合轍、當著其奇、以見東聖西聖心理之必同、果出於相取、當著其實、以見多聞從善之有益。果二公未嘗相取。而出於校刊者集腋成裘、亦當爲後序以發明之、以見期於鄙書完善、而非借光鄰壁。不則無解於僕之疑、亦無解於天下後世。或謂戴取趙、或謂趙取戴之疑、是則足下昆仲將尊戴而適侵戴、將助趙而適誣趙也。此僕之所以不敢不言也。(中略)足下及今爲後序、刊於趙書之末、洞陳原委、破天下後世之疑、俾兩先生皆不被竊美之謗於地下、僕實企望焉。願明以教我」

(11) 陳橋驛 「水經注戴・趙相襲案概述」前掲書所収 三〇二頁

(12) 鄭坤德 「水經注趙戴公案之判決」燕京學報十九期所収 一九三六年 七頁

(13) 段玉裁 『經韻樓集』四七九頁 「二月、戴東原之嗣子中浮、携直隸河渠書稿一百單二卷合二十四冊至蘇州、屬先生校刊。先生曰我力能校而不能刊也。披讀往復、見其書繁重、纖悉畢備。每與李松雲言此必有底稿、斷非戴氏一年之內一手所能成也」

(14) 前掲書 四一八頁 ここに段玉裁の「与王懷祖第六書」が所収されており「直隸河渠書一事、誠如尊論。但鳩同志輯費刻之、此事恐難、安得此等同志也」とあることから、王

念孫にも相談していたことがわかる。

(15) 前掲書 一七五頁〜一七六頁 「大門中恪敏公總督直隸、乾隆戊子延請戴東原師於蓮花書院、撰次直隸河渠書一部、凡百有二卷。(中略)非恪敏經畫不能創此書規模、非東原師熟於地理、博洽精敏、不能年餘遂成此書、爲國家鉅製。顧恪敏未及進呈、閣下方冲年、書遂流傳落吳江、惟東原師藏其副爲真本、乾隆癸巳、東原師奉特召充四庫館纂修、高宗純皇帝深知戴震、天文地理之學、精義入神、其考正水經注及九章・周髀算經等書、御製詩篇嘉美頒行。洎丁酉卒都門、其著述藏曲阜孔戶部誦伯繼涵家、此書在焉。洪舍人蕊登榜作戴行狀、孔檢討搗約廣森作戴氏遺書總序、皆記直隸河渠書六十四冊。嘉慶十四年、有吳江捐職通判王履泰者、攘竊此書、易名幾輔安瀾、進呈、上嘉爲有用之書、賞以同知、發北河效用、仍命武英殿刊行。聖明天縱、一見此書、即知非通儒不能爲、故布其書於天下、與高宗皇帝賞識戴震先後一揆、豈非千載盛事哉。且上所謂有用者、非獨謂其考古精覈也、亦謂切於今用、爲三輔輿利除害所必需。(中略)東原師之子中浮、抱曲阜孔氏所藏真本入都、與軍機章京龔麗正往刻板處略觀、知其悉用原書妄爲刪併、略增乾隆戊子以後事實、改百二卷爲五十六卷、且移易其目次先後、原本首衛河、以地勢自南而北爲次也。今乃首永定河、則全失其義例。竊謂履泰何物、乃敢刪定通儒之書、恐失著書之用、閣

下文章政事、淵源世美、宜奏明是書原委、取真本進呈重刻、以章聖鑒之明、以成先志之美、以發東原著作之光、以懲履泰盜名之罪、究紹聞之實用、助聖代之經綸、幸甚、幸甚」

(16) 前掲書 一七八頁〜一七九頁 「是年冬、松雲入都、杭州何夢華元錫來言、直隸河渠書乃趙東潛作、於戴先生無涉、往者孔洪谷丈收入戴氏遺書中、誤也。余以二十四冊示之、彼云、趙氏之書尚多一倍、不止此也。余曰、吾故疑吾師一年內不能成書至百二卷之多、今足下云趙書乃更倍此、然則趙爲草創而戴爲刪定乎。屬其將趙書寄來一觀、未至也。十六年春正月、松雲自都還、以武英殿聚珍板幾輔安瀾志相示、知其確爲竊取戴書、而刪繁就簡、不學無術、所爲頓失盧山真面。蓋此書之美在繁。而彼盡將夾行細注刪去、今考訂古今者、俱假焉在幽室之中、是可惜也。二月、松雲復以葆巖制府札相示、知夢華已將趙本抄送葆巖、而葆巖問趙氏作此書可有證據、松雲屬余考之。余謂趙氏爲此書惟汪韓門集保定旅懷詩道及之。而董浦・謝山皆其老友、集內皆未道及之、即東潛文稿亦無道及之語、然其書稿藏於家、固確然可信爲東潛之作也。至於吾師之書、則有孔洪谷之收藏、有洪舍人榜之戴氏行狀、有孔檢討摺約之戴氏遺書總序、有程方正易田之答余書、有余親聞吾師說撰此書之語、有師親筆戊子、余應方制府之請、寓保定蓮花池園內、適河間同知黃君尋灤河源至之語、皆可據證。夢華乃云、此書無預戴氏、乃

非確語也。松雲云、東原先生非攘竊人書者、若非東原大爲刪潤、斷不抄其副本自稱己書。蓋趙草創而戴刪改必矣。松雲所見正與余合」

(17) 前掲書 一七九頁 「今者二公之書、固當並存。趙雖精於地理、而地理之學尚不及戴、文章之學亦不及戴。在今日而論、自當以戴爲主、以趙書校勘其訛字。戴書唐河卷一中有云、杭人趙一清補注水經、於地理學甚核、嘗游定州、爲定州牧姚立德作盧奴水考、並附於右下。附盧奴水考云云、今此編見東潛文稿、吾師方採擷趙文、此豈得謂戴書即趙書耶。趙名直隸何渠水利書、吾師曰直隸何渠書、則水利二字吾師所刪、以何渠足以包之也」

(18) 前掲書 一七七頁 「乾隆甲申以前延趙東潛草創之、戊子延東原師刪定之、支幹經緯、古今變遷、事實清析、如視諸掌、令治水患興水利者、雖百世有所持循、此其功不小矣。趙書名直隸河渠水利書。百三十二卷。戴改稱直隸河渠書。去水利二字、百二卷、減原書三十卷、而灤河熱河僅存涯略一卷、因恪敏是年秋後薨於位、而書遂未竟也。趙書灤河六卷、若依戴本刊版、則灤河可取趙書補綴。戴本係影抄曲阜孔府原本、原本舛訛特甚、今有趙本互校、想訛脫尚可推求」

(19) 戴震『戴震全書』七卷 黃山書社 一九九七年二〇九頁 「夫經始著書甚難、踵事修書稍易、古今通義。戴氏乃不欲自居於易、遂深沒一清草創之勞。雖以茂堂從學之久、與論此書



非一端、亦不聞戴氏更有藍本。直至何元錫從小山堂寫其副本、然後知戴書即趙書也。戴書中載趙盧奴水考、云杭人趙一清嘗游定州、爲州牧姚立德作此竝附於右云々、一似趙氏絕無與於河渠書者。茂堂乃曰趙雖精於地理、而尚不及戴文章亦不及戴。此語良然、然不得因其不及、遂謂盜據之無傷也。使戴氏標明原本而刪補之、豈不甚美、何乃爲此穿窬之行乎」

- (20) 前掲書 七卷 二一七頁 「修直隸河渠書時、東原修此書實承東潛之後、當時物力豐盛、趙氏河渠書百三十卷、戴氏河渠書百十卷、并有數寫本。又趙校水經注、全氏雙韭山房錄有二部、則全氏校本、趙氏亦必有之。水經注爲纂河渠書時第一要書、故全・趙二校本、局中必有寫本無疑、東原見之、自必在此時矣」

- (21) 丁山「酈学考序目」鄭坤德・吳天任纂輯『水經注研究史料統編』所收 中華民國七十三年 三十六頁「段玉裁直隸河渠書辨、引戴書卷一唐河中有云、杭人趙一清補注水經、於地理之學甚核、嘗游定州、爲州牧作盧奴水考。是乾隆卅三年（一七八六）、戴修何渠書時、確見趙釋」

- (22) 余嘉錫「四庫提要弁證水經注按語」前掲書所收 四〇頁  
 (23) 鄭德坤「水經注趙戴公案之判決」燕京學報十九期所收 一九三六年 三七頁

- (24) 森 鹿三「最近における水經注研究」『東洋学研究 歴史

地理編』東洋史研究会 昭和四五年 一九四頁

- (25) 胡適「平定張穆趙戴水經注校案」『胡適全集』十六卷所收 安徽教育出版社 二〇〇三年 三四二頁

- (26) 胡適 前掲書 十六卷 三四二頁

- (27) 拙稿「段玉裁と顧千里の論争に關する一考察」無窮會『東洋文化』復刊百六号所收 二〇一一年 二二頁

- (28) 戴震『戴震全書』六卷 六九一〜六九二頁「杭州趙東潛一清精於地理之學、研摩水經注者數十年、但其校本從未至京師。先生與趙雖或相問、未嘗相識、其所業未嘗相觀也。四庫館搜討遺書、趙書亦得著錄、其書校正字句、及剖析地理最詳、而更正經・注、一如戴本者、蓋趙精詣絕羣。鄭全謝山太史七校是書、深窺秘奧。兩公或閉戶暗合、或麗澤相取、而其說往往與先生同、是可以知著書精美、不患千年後無校讎誤正之人、而學問深醇、即未相謀面、所言如一。且趙書經錢塘梁處素履繩校刊、有不合者、據戴本以正之、故今二本大段不同者少也」

- (29) 河田悌一「同時代の眼―章学誠の戴震觀」『中国哲学史の展望と摸索』所收 創文社 昭和五十一年 七七六頁

**Duán yúcai's Solution about Plagiarism  
seen in Dáizhèn's Shuǐjīngzhù**

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education  
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi  
807-8586, Japan

No English abstract